

## 今年度の野付小の教育がスタートします

校長 青坂信司

◆私が野付小学校に来て、3年目を迎えます。着任当時、私は野付小学校の教育をスタートさせるに当たって、どのような学校にしたいのか、どのような教育を大切にしていっていいのかということを考えました。その結果、教育の原点である「一人ひとりの子を大切にしたい」という極めて当たり前のことを今一度自分の腹に据えようと考えました。そしてそれは、野付小の過去から引き継がれてきていることでもありました。

◆しかし、「一人ひとりの子を大切にしたい」という考えはあったとしても、具体的にどうすることが「一人ひとりの子を大切にしたい」ということなのか、はっきりとはわかりませんでした。そこで、私は一人ひとりの子を大切にしたいということを具体的な場面に応じて文章化してみました。それが以下のものです。二つ紹介しましょう。

朝、子ども達は笑顔で登校してくる。先生と出会うと大きな声であいさつを交わす。先生ばかりでなく、道行く大人ともあいさつを交わす。交通安全指導員の方や登校を見守る大人たちとも自然にあいさつを交わしている。

「おはよう！」

「おはようございます」

校門で、玄関で、教室で、挨拶の音が響き渡る。元気な子供たちに交じって、挨拶を元気にできない子もいる。しかし、そのことを誰も責めたりはしない。挨拶が出来ない子がいても、それでよいと思っている。自分から挨拶をすること、挨拶しようとする、それが大切であり、その時の心の状態や体の状態で挨拶が出来ない日があることもみんな知っている。自分のことは自分で正していくこと、他人の心には土足で踏み込まない、それが尊重される。ここでは、元気な子もおとなしい子も、活発な子も内気な子も、勉強ができる子もできない子も、スポーツが得意な子も苦手な子も、それこそどんな子でもみんなが大切にされる。

一人ひとりの子ども達が、「自分でもやればできる」「自分にもいいところがある」と考え、常に前向きにひたむきに努力し続け、少しでも成長することへの強い執念を持っている。それは、どんな子でも成長させるのだという教師側の強い信念があり、少しでもより良い実践にしていこうと日々学び続けているからだ。

少年団や各種コンクールで素晴らしい成績をとることやテストで満点をとることは、子どもに自信を与えることになるので、大切なことだ。しかし、そのことだけでなく、人知れずゴミを拾うことや靴箱にきちんと靴を入れるといった、ごくごく何げないことができる子どももまた、この野付小では高く評価される。

その子どもの何げない、ごくごくささやかな行動や言葉を見逃さない教職員が、この野付小にはいる。教師もまた、さりげなく子どもをほめ、時には大げさに子どもをほめることもある。それは、子どもの変化に敏感であり、子どもの事実を大切にすることからこそ、できることだ。

そして、表面的な子どもの変化や子どもの事実だけでなく、その裏側にある心の有りように、いつも気にかけている教師集団がいる。その教師や教師集団の子どもへの受容的姿勢が、子どもに伝わり、子どもから保護者に伝わり、野付小が今まで以上に信頼を勝ち得ていく道につながっている。

◆平成24年度の野付小の教育がスタートします。全職員一丸となって、「一人ひとりの子を大切にしたい」教育に邁進いたします。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。